

# へき地在宅療養がん患者と その家族が求めるもの コメント

## 長谷川明弘

東洋英和女学院大学

甲南大学人間科学研究所

WS「へき地医療と臨床心理学的支援」

平成26年3月1日

2014年1月1日

1

## 地域住民への問いかけ

- 安心して生活できていますか?
  - どのように安心してできていますか?
  - 心配事が生じるとしたら?
- どのように安心して過ごしてきたのですか?
  - 困り事をどのように解消してきたのですか?
- 話していて気づいたことがありますか?

2

## 主体性の喪失

- 「患者」となることにより本来有していたであろう主体性が奪われてしまった可能性
- 患者=病人である前に「人」である。
- 病気を持った「人」であるという枠で接することが求められる。

3

## 関係づくり

- 専門家が専門性を発揮する前提としてユーザーから役割を任せてもらえることが必要。
- 専門家である前に社会人の一人である。

4

## 場所と機会の確保

- 集う場を設定する
  - 患者という役割
  - 家族という役割
  - 地域在住者という役割
- 役割の中で相互に話す機会を持つ事
  - 主体性の回復が期待できる

5

## 通訳者としての機能 特に臨床心理士が出来ること

- 構成員間で「思い」を表現しにくい関係が存在しているようだ
- 構成員
  - 患者
  - 家族
  - 専門職(自治体職員)
- 臨床心理士は、「思い」を共有する場所と機会を確保し、相互に表現できない気持ちを「通訳」することができるのではないか。

6

## 心理社会的支援と健康

心理社会的支援は、  
ソーシャルサポートと呼ばれ、  
健康作りの中で、最も重要な役割  
を持っています

## 支援ネットワークの分類

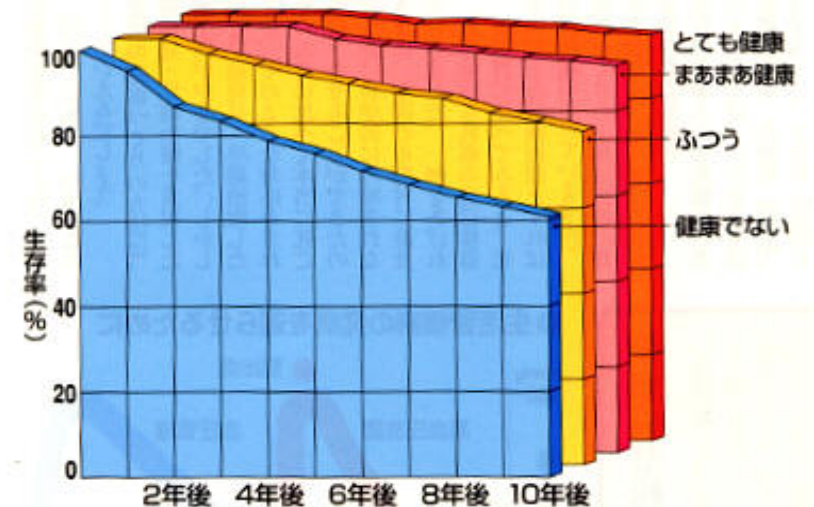
- 手段的支援: 手伝い、金銭、物品
- 情緒的支援: 安心、信頼感、親密、

# 健康作りにおける 個人の役割として

- ・ 集う場を活用する
- ・ 自分独自の興味をもつ
- ・ 支えることは支えられること
- ・ 動物や自然とのつながり



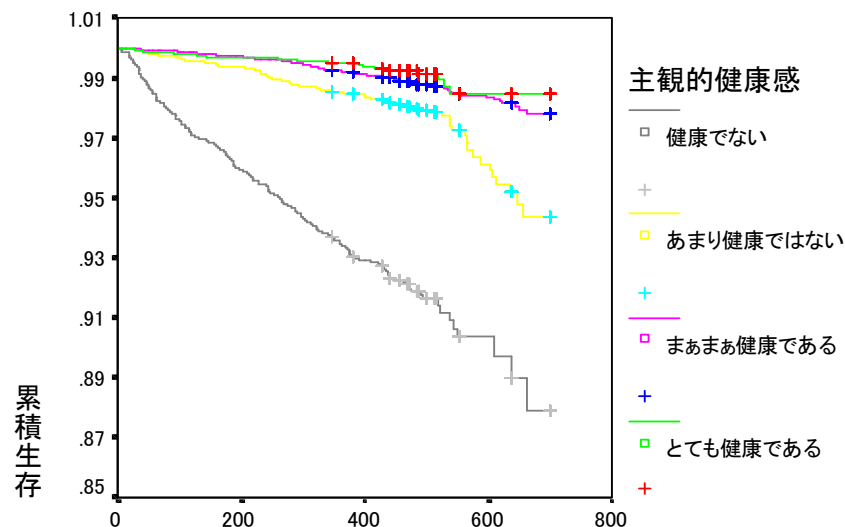
●自分で健康だと感じる人は長生きしている



出典: George A. Kaplan, 「アメリカ疫学雑誌」113巻, 292-305頁, (昭和56年)

現在の自分の健康状態が優れているかどうか、自分で判定するのを「主観的健康感」といいます。「とても健康」という人と「健康でない」という人とは、10年後の生存率で30%も差がついてしまうことがわかります

## 生存日数と主観的健康感



調査開始日から2000/6/30までの生存していた日数

## システム理論 system theory

- ・ システムのレベル
  - 個人内界
  - 個人
  - 家族
  - 居住地域
  - 自治体
  - 国

システムのどこに働きかけているのか

## 連携においてイメージ構築が求められる理由は・・・

■心理介入、心理査定、その他の情報から



見立てること：経過、対応を予想



他職種に見通しを伝えながら連携をとり、新しい現実(イメージ)を構築する

## 臨床心理士の存在評価 顔を知ってもらえているか？

組織内の存在評価  
組織外の存在評価

## 臨床心理士のおかれている立場

■多くの専門職が国家資格となった現状  
臨床心理士・医療心理士の国家資格法案見送り  
実証(研究)と実践が専門家に求められている現状  
■スクールカウンセラーの予算削減



自分達の存在価値を  
アピールせねばならない  
しかしアピールのしすぎは逆効果

## 実践経験・専門知識は 臨床心理士にとって 最大の財産

- 連携を求める他職種は、専門性に裏付けられた見解を知りたいと思う
- 臨床心理士として「どう考えるか」という視点を持つこと

# 地域活動の基礎力

- 位置把握(どこにどのようにいるの)
  - 組織形態(教育、医療、福祉、産業、司法、個人経営)
- 関与力(きっかけをもつこと)
- 交渉・調整力(はしわたしすること)
- 連携力(つなげること)
- 組織化力(ととのえること)
- 後方支援力(みまもること)

17

# 面接と観察が基本

- 臨床心理学で、面接して、質問した上での応答を観察し、さらに質問をすることの繰り返しになる
- 検査(条件統制という点では実験)では、個人差や条件による差違を明確にすることが加わる

18

# オンゴーイング・アセスメント

ongoing assessment

関係性を診ながら関わりを持つこと

- 治療面接のあらゆる過程で、絶えず進行・継続しているアセスメントのこと。  
(O' Hanlon,2002;宮田,2004)
- 1. どんな関係が望まれているか
- 2. どんな悩みや不満があるのか
- 3. 何が目標で、どんな結果を望んでいるのか
- 4. その目標や望まれる結果が進展していることをどのようにして知るか

アセスメントは柔軟に修正、変更される  
ブリーフセラピーではアセスメントと介入が同時

19

# 必要とされる需要を開拓する姿勢

–オンゴーイング・アセスメント–

- 需要というものははじめからあるものではない。割り当てられるものではない。需要は、メーカーがアイデアと生産手段によって作り出すものだと考えるー本田宗一郎「俺の考え」よりー
- 対人援助職は、組織や個人の中に眠っている資源を探し当てるために、まず着手しやすい何を動かしてみる。その後、新しい情勢を見てから、次の動き方を考える。働きかける側(対人援助職)と働きかけられる側(個人や組織など)の相互の関係性の中で、創意工夫が繰り返され、そこに必要とされる事象(需要や目的)が浮かび上がってくる。

20

研究の紹介

## 「生きがい」の地域差

21

## 「生きがい」の地域差 のまとめ

- 農村地域と大都市近郊地域の間で「**生きがいあり**」の割合に有意差を認めなかった。
- 「**生きがい**」の関連要因として、両地域共に**健康度自己評価、知的能動性**ならびに**社会的役割**が示された。
- **農村地域では家族構成が強い関連**を認め、性別や世代によって関連の強さが異なった。
- 大都市近郊ニュータウン地区では男性において入院経験の有無が「**生きがい**」の有無との間に強い関連があり、世代によって正負の関連が変動

22

### 【考察】

#### 家族的な「生きがい」と 今ここでの「生きがい」 男性の特徴－「生きがい」の構造－

- **男性**は、『家族的な「**生きがい**」対象』から『年齢と生活自立』ならびに『伴う感情』への影響がほとんどなし
- 女性は子どもならびに孫と「**生きがい**」の有無との間に正の関連を有していたが、男性は既婚の子どもとの同居に限っては負の関連を有していたという報告(長谷川ら,2003)
- 男性は、家族を「**生きがい**」の対象とするよりも『「今、ここ」での「**生きがい**」対象』に比重をおきながら「**生きがい**」全体のバランスを保っている可能性

23

### 【考察】

#### 「伴う感情」を高める・維持する方策 －「生きがい」の構造－

「年齢と生活自立」は

「知的能動性」

「手段的自立」

維持することの重要性を情報提供

加齢は制御できない

24

## 「生きがいづくり」事業

—自治体・専門家と個人の役割—

### • 自治体や専門家

孫や子どもといった家族と一緒に参加できる場所の提供  
やボランティアや自治会など社会と関わる機会の提供  
以下の点も情報提供可能

### • 個人

学習や教養を高める活動など知的機能や手段的自立を  
維持すること、スポーツやレクリエーションを楽しむこと  
が重要になってくる

### 支援環境の整備

25

## 農村地域の特徴

-本研究の成果-

- **男性**は前期において生命の危機に瀕する疾患を経験した場合に「生きがいあり」と負の関連を認め、孫世代との同居の場合に正の関連
- **女性**は交友活動に正の関連を認め、女性の後期において既婚ならびに未婚の子ども世代との同居が関連
- さらには**性別・世代を問わず**、知的能動性ならびに社会的役割と「生きがい」の有無との関連。
- 男女をあわせた全体の検討では男性よりも女性である場合に、正の関連を認めた。

26

## 大都市近郊地域の特徴

-本研究の成果-


- **男性**において入院経験の有無が「生きがい」の有無との間に強い関連があり、世代によって正負の関連が変動した。さらに近所や友人づきあいの頻度の高さと正の関連
- **男性の後期高齢者と女性の前期高齢者は**集団活動への参加の高さと正の関連
- **性別や世代を問わず**うつ状態が強まると「生きがいあり」との間に負の関連を有することも示された(農村地域では検討していない)。

27


## 家族発達段階

1. 求愛(自我同一性の確立)と結婚
2. 子どもの誕生と**育児**
3. 夫婦関係の確立と子どもの学齢期
4. 中年期の危機と子どもの巣立ち
5. 退職と夫婦関係の再構築
6. 老年期の苦悩と生涯現役

青年期の自我同一性(アイデンティティ)が確立される時期には、丁度、その両親は中年期、その祖父母は老年期にあたる。



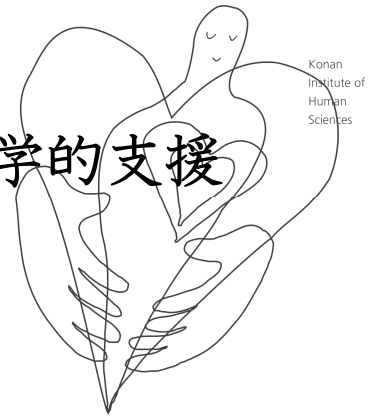
## まとめ

- 地域にあるリソースの活用
    - 寄り合いに出向く
  - 教えてもらう(ワンダウンポジション)での仲間入り
    - 地域の歴史
    - 方言
  - 価値観の確認
    - 当事者ならびに関係者
- 



第11回KIH S心理臨床ワークショップ

へき地医療と臨床心理学的支援



- 日 時：2014年3月2日（日）10～17時  
会 場：甲南大学人間科学研究所（甲南大学18号館）  
話 題 提 供：岡田 憲（社会医療法人石州会六日市病院／臨床心理学）  
指 定 討 論：長谷川 明弘（東洋英和女学院大学／臨床心理学）  
宮川 貴美子（甲南大学文学部／臨床心理学）  
企 画：富樫 公一（甲南大学文学部・人間科学研究所／精神分析・病院臨床）  
共 催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム  
後 援：兵庫県臨床心理士会  
対 象：へき地医療や在宅療養支援の専門家、あるいは、さまざまな現場で高齢者への心理的支援を実践している臨床心理士や職員、それに興味がある大学院生  
定 員：30名  
参 加 費：5000円（当日受付にて徴収します）

ワークショップ趣旨

人間科学研究所では、地域の専門家を対象に、研究事業に関係した研修会を毎年開催しております（研究事業の詳細はウェブサイトをご参照ください）。今年度は、東洋英和女学院大学の長谷川明弘先生をお招きして、「へき地療養患者に対する臨床心理学支援」に関する研修会を実施いたします。人口の高齢化、地域経済格差、地域医療格差、過疎化、といった問題は、それぞれ独立したものではありません。それらは相互に影響し合いながら問題を複雑にし、今後ますます大きな問題になることが予想されます。へき地医療拠点病院で臨床心理学的支援を研究・実践されている六日市病院の岡田憲先生に話題提供いただき、この分野に興味関心を抱かれる実践家の方々と多角的な議論ができればと思っております。

甲南大学人間科学研究所  
所 長 川田 都樹子

## プログラム

---

受付 9:30～9:55  
シンポジウム 10:00～13:00 (途中休憩をはさみます)

「へき地在宅療養がん患者とその家族が求めるもの」

昼休憩 13:00～14:00

※会場のすぐ近くには飲食店やコンビニエンスストアなどありません。  
昼食はご持参いただくか、駅周辺までおでかけいただくことになります。  
館内に自動販売機はありませんが、お茶等は会場にご用意いたします。

事例検討 14:00～17:00 (途中休憩をはさみます)

- ① 岡田 憲「老年クライアントと若年セラピストとの心理療法  
—次の自分へ夢を託すニード—」
- ② 宮川 貴美子「高齢者への箱庭療法の可能性をめぐって」

## 申込方法

---

メールにてお申し込みください

件名を「ワークショップ参加申し込み」とし、本文に①氏名、②ご住所、③年齢、④職業(学生の場合は学校名、学年)、⑤臨床心理士資格の有無をご記入の上、下記アドレスまでお送りください。

kihs\_info@yahoo.co.jp

※締切は2014年2月17日(月)16:00です(厳守)

参加の可否は申込締切後 2月21日(金)までにメールにてご連絡いたします。

万が一この期間を過ぎても連絡がない場合、お手数ですが当研究所までお問い合わせ願います。

**注意**携帯からお申し込みの場合は、上記アドレスの受信許可設定をお願いいたします。

参加費(5000円)は、当日受付にてお支払いいただきます。

釣銭の必要がないようにご準備ください。

\*臨床心理士の方へ

本研修会は、条件が満たされれば、「臨床心理士」継続研修機会として申請予定です。  
継続研修ポイント取得を確約するものではありません。

## 講師紹介

---

岡田 憲（おかだ・けん）

臨床心理士。へき地医療拠点病院にて勤務。

口頭発表

老年クライアントと若年セラピストとの心理療法における双子自己対象ニード一次の自分へ夢を託すニード—（日本心理臨床学会第31回秋季大会）

<講師より一言>

わが国の施策として在宅医療が推進されています。へき地では都市部と比べて医療従事者が不足しており、在宅医療体制の構築は困難かつ緊急性の高い課題です。へき地在宅医療において臨床心理士が果たすべき役割とは何か。この度、へき地在宅療養患者やその家族が求める臨床心理学的な支援を明らかにすることを目的に、4組の在宅療養中のがん患者及び家族にインタビュー調査（2012年日本心理臨床学会研究助成を受けて実施）を行いました。その結果を話題提供として提示し、皆様よりご意見をいただきたいと思っております。

岡田 憲

宮川 貴美子（みやがわ・きみこ）

臨床心理士、産業カウンセラー、スクールカウンセラー。専門は臨床心理学、特に高齢者の心理学的支援に関心がある。

著作・翻訳

『狼男の言語標本—埋葬語法 of 精神分析 / 付デリダ序文』 ニコラ・アブラハム / マリア・トローク著 港道隆、宮川貴美子 ほか訳 法政大学出版局（2006）

論文

高齢者における箱庭制作の試み 箱庭療法学研究（2006）

箱庭表現による人の心の発達過程の研究 （報告書、分担共著）甲南大学平生太郎基金科学研究報告書（2005）

ほか

<講師より一言>

老いを生きるとはどういうことでしょうか。これは、「老い」がまだ遠い先にあると感じている援助者にとっては難しいテーマかもしれません。そこでこのワークショップでは、調査協力として高齢者により制作された箱庭を提示して、老いを生きることの意味、いかに死ぬか（すなわち、いかに生きるか）ということ、高齢者の心のありようについて考えます。当日はフロアの先生方からさまざまなご意見をいただきながら、高齢者の心理学的支援の可能性をめぐり議論したいと考えています。

宮川 貴美子

## 長谷川 明弘 (はせがわ・あきひろ)

臨床心理士。臨床動作士。認定催眠士。専門は臨床心理学：心理療法(ブリーフサイコセラピー；ブリーフセラピー、臨床動作法、催眠法)。個人、家族、集団、組織を対象として生涯にわたる発達段階への支援。

1995年愛知学院大学文学部心理学科卒業。1997年新潟大学大学院教育学研究科修士課程(学校教育専攻障害児教育コース)修了。2003年東京都立大学大学院都市科学研究科博士課程(都市社会システム系)修了し、博士(都市科学)を取得。金沢工業大学にてカウンセラーと講師を経て、2013年から東洋英和女学院大学准教授。

日本ブリーフサイコセラピー学会常任理事、日本催眠医学心理学会常任理事。

### 著作・翻訳

『高齢者の心理』 (分担執筆) おうふう (2011)

『軽度発達障害へのブリーフセラピー』 (分担執筆) 金剛出版 (2006)

ほか

### 論文

統合的な立場からブリーフセラピーを再定義するー試案・私案・思案ー ブリーフセラピーネットワークカー (2012)

学生相談におけるブリーフサイコセラピーの多様な実践 (共著) ブリーフセラピーネットワークカー (2011)

「ブリーフサイコセラピー研究」の動向と提案 (共著) ブリーフサイコセラピー研究 (2010)

高齢者における地域別にみた「生きがい」の実証研究 博士学位提出論文 (2003)

「からだ」と「こころ」をつなぐ心理療法のかたち (共著) 心療内科学会誌 (2003)

日常生活における「自然な」心理療法 ブリーフサイコセラピー研究 (1998)

ほか

### <講師より一言>

高齢者における「生きがい」の地域差をテーマにして研究をしていました。医療領域で認知症をもった高齢者とその家族への支援と心身症を有した方を対象にした実践活動の後、産業領域や大学の学生相談室で実践活動をしてきました。心理学の専門家として実践活動を行うときに心がけていることは「サービスに満足してもらえるかどうか」「有効な支援はどんなことか」です。当日はライブ感を大切にしたいと思っています。

長谷川 明弘

## 富樫 公一（とがし・こういち）

臨床心理士。米国 NY 州精神分析家ライセンス。National Association for the Advancement of Psychoanalysis (NAAP) 認定精神分析家。博士（文学）。専門は精神分析、臨床心理学。純和会矢作川病院精神科常勤臨床心理士を務めたのち、渡米。National Psychological Association for Psychoanalysis (NPAP)、Training and Research Institute for Self Psychology (TRISP) で精神分析家の訓練を受ける。University of Southern California 招聘研究員、広島国際大学大学院実践臨床心理学専攻准教授を経て、現在甲南大学文学部教授。International Association for Psychoanalytic Self Psychology 評議委員、International Journal of Psychoanalytic Self Psychology 編集委員、一般社団法人日本精神分析的自己心理学協会代表理事。主な受賞歴に、National Association for the Advancement of Psychoanalysis, the 2009 Gradiva Award (Best Journal Article)。

### 著作・翻訳

『ポストコフートの精神分析システム理論—現代自己心理学から心理療法の実践的感性を学ぶ』 誠信書房（2013）

『関係精神分析入門—治療体験のリアリティを求めて』 岩崎学術出版社（2011）

ほか

### 論文

Mutual finding oneself and not-oneself in the other as a twinship experience. (*International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 7(3), 352-368. (2012)

Being Human and not being Human: The Evolution of a twinship experience. Paper presented at the 36 th Annual International Conference on The Psychology of the Self, Chicago, IL. (2013)

Is It a Problem for Us to Say, “It Is a Coincidence That the Patient Does Well” ? *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*. (in press)

ほか

### <講師より一言>

私は、普段は精神分析臨床を中心に行っていますが、部屋にこもって面接するだけではない心理臨床の重要性も感じています。その中で、最近特に注目しているのが、へき地医療現場の患者やスタッフ、へき地在宅療養患者やその家族への心理的支援です。そのような現場では、心理的支援の意味をより広くとらえて活動しなければなりません。ただでさえ人材が少ない地域では、心理専門職が活躍できる可能性の幅は大きいと考えています。

富樫 公一

問い合わせ先（メールにてお問い合わせください。）

〒658-8501

神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学人間科学研究所

Mail : [kihs\\_info@yahoo.co.jp](mailto:kihs_info@yahoo.co.jp)

Web : <http://kihs-konan-univ.org/>

## 会場

甲南大学18号館3階 甲南大学人間科学研究所 講演室

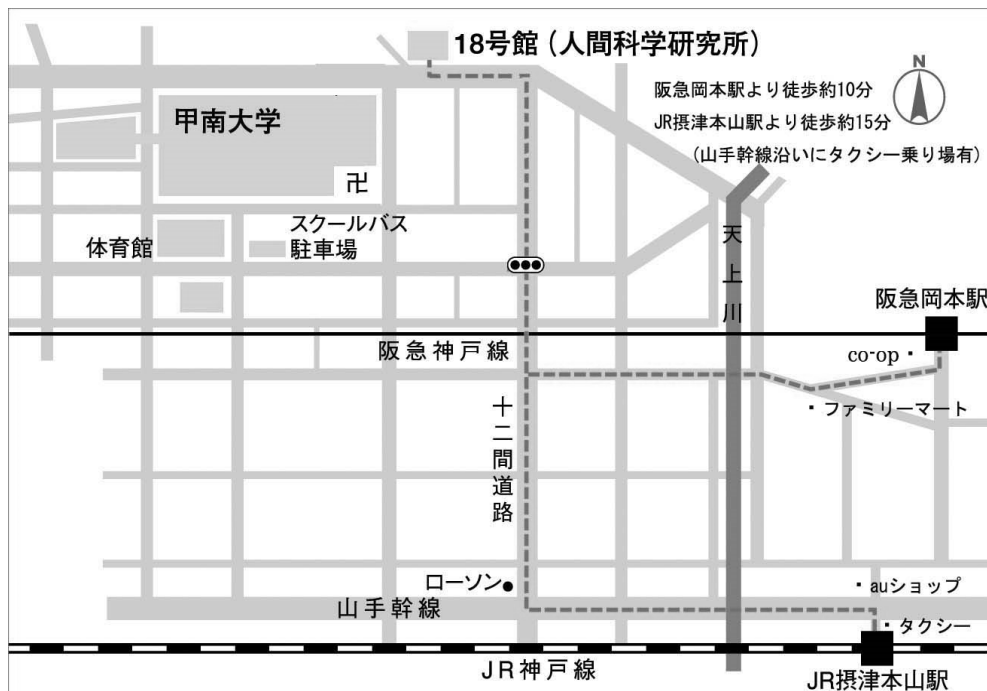
受付（9：30～）：甲南大学18号館3階講演室

甲南大学本校舎とは少し離れた場所にありますのでご注意ください。

お車でのご来場はご遠慮ください（特別な事情がある場合は事前にご連絡ください）。

当日の到着が遅れる場合は必ずご一報ください。

やむを得ない事情で参加できなくなった場合も、必ずご連絡をお願いいたします。



甲南大学  
人間科学研究所

Konan Institute of Human Sciences  
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9番1号  
Tel/Fax : 078-435-2683  
E-mail : [kihs@center.konan-u.ac.jp](mailto:kihs@center.konan-u.ac.jp)  
URL : <http://kihs-konan-univ.org>